

平和への祈り―聖書最後の言葉

イザヤ書 63章 15～19節 エレミヤ書 29章 11～14

ヨハネの黙示録 22章 18～20節

2015年8月2日 平和聖日礼拝より

説教 武田真治 牧師

1、平和聖日礼拝の起源

私たち日本基督教団では、8月の第1主日礼拝を「平和聖日」と定めて献げています。この起源は比較的新しいものであり、1962年12月に教団常置委員会にて、広島と長崎の被爆を覚えるために制定されたものです。その際、忘れてはならないことはこの平和聖日制定を教団総会に提案した教区が、私たちが属しているこの西中国教区であり、その教団への提案を決めた1962年5月2日～3日の西中国教区総会はこちら、この広島教会の礼拝堂で開催された総会であったということです。1960年に完成したこの会堂をお披露目も兼ねて教区総会に使っていただくとその年だけにお招きした総会でした。

被爆教会であるこの広島教会の礼拝堂で、広島と長崎の被爆を覚える平和聖日制定が発議されたことは、歴史を通して働かれる神様の不思議な導きの一つと言い得るのではないかと思います。

2、この世で預言者として生きる

今、世の中では創価学会という宗教団体を母体としている公明党が、政府が提案した集団的自衛権の行使に賛成しました。平和宗教、平和政党を標榜して来た人達が、戦争への道を開く事になりかねない法案に賛同したということは、後の時代の人々からの批判の謗りを免れないだけでなく、かつての暗い時代の繰り返しになるのではないかと危惧を持ってしまいます。しかし、これは決して他人事ではないと思います。

よく言われますように、キリスト者はこの世に於いて「預言者の働きをなせ」と奨められます。神様からの言葉を預けられた者としてこの世に語り掛け、警告し、悔い改めを迫る役割を為すのだと。

その務めを神様から託されていることは疑いようがないことでしょう。ただし、そのことがこれまでどちらかと言えば、世の中の不正や悪を批判し、その問題性を提起することばかりに主眼が置かれて来たように思います。そこには世の中の愚かさを高所から見下すような高慢が見え隠れしていると人々から見透かされているのではないかと思います。

「預言者として生きる」ということは、ただこの世の悪や罪を指摘し続けることだけに留まるではありません。その点をよく教えてくれるのが今日の預言者イザヤの言葉ではないかと思います。

即ち「どうか、天から見下ろし 輝かしく聖なる宮から御覧ください。どこにあるのですか あなたの熱情と力強い御業は。あなたのたぎる思いと憐れみは抑えられていて、わたしに示されません。」と。このイザヤの言葉は人々に向かってではなく、むしろ神様に向かって語っています。彼は民の側に立ち、今の現実の状況の中に神様の御業が見えない、あなたの御意思が分からないと叫んでいるのです。いわば地の底から、神様に向かって助けと救いを懇願している言葉です。これも預言者の言葉でありこの行動も預言者の役目なのです。

確かに、一方でイザヤは、預言者として神様の代理として人々の罪を告発し、裁きを告げることもしています。しかし、その一方でこの世界の有様に嘆きながら、この世に生きる一人の人間として「どうして御業を表してくれないのか？」と神様に問い叫ぶことも為しています。神様を告発している言葉ともとれるほどの厳しさで！

3、究極の「祈り」

勿論、このようなイザヤの告発の言葉を「不信仰な言葉だ」と批判する人もいるでしょう。神様の御業は、その時のイザヤが分からないでいるだけで実はその現実の中にもしっかりと保持されていると。それはその通りです。でも「御業が見えない」と思えるような酷い現実や状況というものには在り得ると思いますし、そこからの問い掛けの言葉に蓋をしてしまうことが良い結果を生むとは思いません。少なくとも預言者イザヤはそうはしていないのです。

また、あまりにもこの世的なあり方が強調されると、現実の中に埋没してしまい、それこそ神様を見失うことになってしまうのではないかと危惧する声も聞こえてきそうです。しかし、受け入れられないような現実を目の当たりにし、その中に神様の御力が働いているとは思えない状態を感じているこの時のイザヤが、それでもなお神様に向かって救いを求めて叫んでいる事実にはイザヤの信仰を見ることが出来るように思います。信仰を持たない者であったならばもはやそのような神様に期待すること自体を止めてしまうのではないのでしょうか。神も仏もあるものかと。イザヤは諦めが悪いと言い得るかもしれませんが。しかし、そこにこそ信仰を見ます。信仰者は神様に対して諦めることはありません。この信仰を持っている限り、この世の悪に染まり、埋没してしまうようなことはないのです。

それ故、イザヤは次に「立ち帰ってください、あなたの僕たちのために（中略）どうか、天を裂いて降ってください。御前に山々が揺れ動くように。」と神様のこの世への到来をひたすら求めていくのです。この受け入れられないような酷い現実を変えてくださるのは、神様、あなたご自身が降ってくださるしかない、そうでなければ真の解決にはならないことを認識しているからです。言い換えれば、自分や人間の力ではどうしようもないことをよく分かっているからでしょう。ここに私たちキリスト者の「祈り」もあると言い得ます。

即ち、現実の酷さと困難さを知れば知るほど、この場所に神様自らが降って来て介入して

下さらなければ、真の解決は来ないと認めて行くこと、それ故に「主よ、降ってください」と祈り求めて行くこと、それがこの世で生きている信仰者として「預言者として生きる」ということのもう一つの大事な務めではないかと思うのです。

その「祈り」に対して神様は必ず応えて下さるという約束の預言が今日もう一つの「エレミヤ書」の言葉です。即ち「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求めるなら、わたしに出会うであろう」と。素晴らしい約束の言葉です。「主よ、降ってください」という「祈り」に神様は必ず応えてくださるのです！

4、キリストのご降誕と再臨と

まさにこれらの旧約聖書に表されている「主よ、降ってください」という言葉にまさに応えて下さった出来事が、イエス様のご降誕でした。今日の箇所、イザヤが「『わたしたちの贖い主（ゴーエール）』これは永遠の昔からあなたの御名です。」と言っているように、私たちの罪をすべて十字架の上で「自らの血で贖って下さった御方」です。究極の救い主、まさに地上に来てくださった神様でした。

そして同時に、イエス様は「まことの人として」この世の中のありとあらゆる苦難と問題の只中に、その最も暗い所まで降りて下さり、人間の持つ罪深さをご自身の身に負って下さいました。それがあの十字架の上での「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という御言葉に表されていると私は思います。今日のイザヤの言葉に通じる、この世の最も低い所からの「叫び」であり「祈り」であったのだと。そのような厳しく、辛い声

を上げなければならない程までに罪人である私たち人間と共に、その最も低い所まで降りて下さったのでした。それ故にこそここに救いが届かなければならないことをその御体と叫びをもって示して下さったのでした。このイエス様の御姿こそ、本日お伝えした「預言者として生きる」ことの真の姿、在り方ではないでしょうか！

5、 聖書最後の言葉！

今日はもう一箇所、「ヨハネの黙示録」を読んで頂きました。実は、ここは聖書全体の最後の言葉です。即ち「以上すべてを証しする方が、言われる。『然り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください。」と。この言葉で聖書は閉じられます。まさに「主よ、来てください」という「祈り」の言葉で終わるのです。これはイエス様が再びこの地上に来て下さること（＝再臨と終末）を求めているものです。

まさに、この世のあらゆる問題や困難の最終的な解決は、主イエスが来て下さる以外にはないのだという信仰がここにあります。人間の知恵だけですべて解決出来るなどということは全くの幻想にしか過ぎません。しかし、どんなに困難で全く解決が見出せないほどの状況でも、主が来て下さるならば解決が与えられるのです。すべての答えは究極的にはここにしかないことを私たちは認め、この地上において預言者として（出来る限りの努力をして）生きていく一方で、最終的な決着は主の再臨にあることを信じ、「主よ、来てください。この現実而降りてください」と祈り続けて行く者でありたい。